「日々の理科」（第 1287 号） 2018（H30）,-1,14

北極圏旅行記 2017-2018 冬（18）

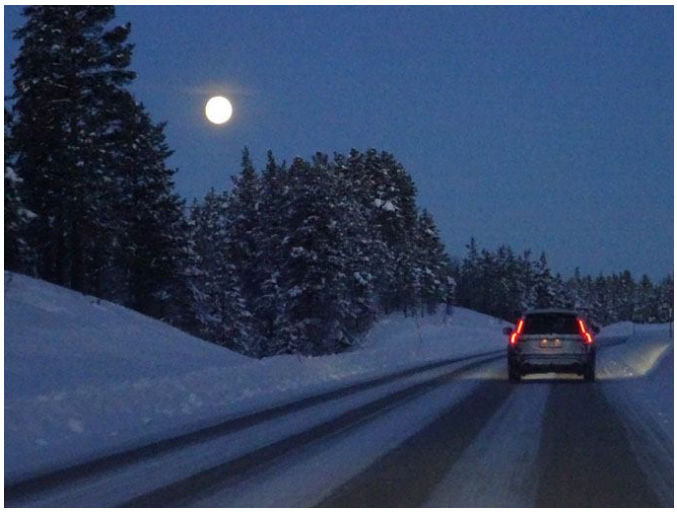
～12/31 透き通ったオーロラ（１）～

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

アイスホテルの近くにある、ユッカスヤルビ教会の隣に、サーミ（先住民）のカフェがある。その前に雪の上に焚火があった。雪の上にトナカイの毛皮が敷いてあったので、少し火に当たらせてもらった。

すばらしい北欧式バイキングの食事が終わると、あたりはもう薄暗くなっていた。真っ暗になると運転が大変なので、すぐにキャビンに帰ることにした。

帰り道、スバッパバーラ村（Svappavaara）からビッタンギ村（Vittangi）に向かう国道は、すっかり凍てついていた。針葉樹の森から月が昇ってきた。急いでいたので、走る車の助手席から撮影してみた。私の持参したコンパクトカメラは、光量不足の被写体の場合、自動的に数枚の写真を撮影し、そのうち最も良く写ったものを選べるようになっている。



（２枚目に拡大写真）

やや望遠にしてもこの通り。地上物も月も、ブレずんいはっきりと写っている。これなら、重いデジタル一眼レフは必要ないかも知れない。

この日は大晦日で、キャビンでゆっくり過ごしたかったが、予報（宇宙天気予報）では、オーロラが出現しそうだったので、私は一人で観測地（AFO ポイント）に出かけた。「出かけた」といっても、キャビンから車で 10 分ほどの原野の真ん中だ。

月夜の空に、ガラスのように透き通ったオーロラが舞っていた。私は手を伸ばしてつかみたかった。